

偽りの鏡

福田和代

3

「湯川先生、ご飯食べれてますか。これ、僕からの差し入れです」
週刊 沖楽の 勇山 記者が持ってきたのは、コンビニの袋に入っ
た肉まんだった。夕食の弁当を食べた後だったが、私は受け取った。
実を言えば、かなり上の空だった。

ビジネスホテルの部屋で話すのも何なので、ロビーで落ち合い、
近くのカフェに来ている。

勇山は、小学校の教師になった後、自分の適性は教員ではないと
感じて、出版社に転職し、記者になったという変わり種だ。疲弊
する教育現場から現状をレポートし、課題をみんなに伝えるのが自
分の使命だと常々語っている。

それで、四年前に私が森田に刺される事件が起きた時も、取材に
飛んできた。

「もう、今朝は『週刊手帖』の新聞広告を見て、心臓が止まるかと思いましたがよ！」

勇山は大きさに言って、マジックで書いたような黒々とした眉を下げた。

「びっくりしたのは僕のほうだよ」

私は先ほど買ってきた週刊手帖の記事を開き、眉間みけんにしわを寄せた。気分が悪い。

「事実無根もいいところだ。週刊誌って、ここまでデタラメな記事を載せるものかい？」

「いや、僕がよその雑誌に難癖なんくせつけるのもなんですけど——。手帖はたしかに、ガセを掴むことも多いみたいです。先日は、歌手のMが不倫相手とホテルで会つてると、写真入りですつば抜いたんですけど、蓋を開けるとMの実妹じつまいだね。Mに訴えられています」

「いい加減だなあ。そんな嘘つぱち、書かれるほうはたまったものじゃないよ」

「この女生徒は、湯川先生の生徒に間違いないんですか」

「元生徒だ」

昼間、校長や教頭らに説明したのと同じことを、勇山にも話してやった。

「先生のおっしゃる通り、目撃証言をした『生徒の保護者』という

のが気になりますね」

コーヒーを前に、勇山は腕組みしている。メモを取らないのは、テーブルに置いたICレコーダーで録音しているからだ。

「手帖にいる知り合いに、この記事を書いた安藤あんどう珠樹たまきという記者について聞いてみたんです。どうやら、外部のライターのようにで

「勇山君の知り合いは、安藤という人を知っているんですか」

「ええ。女性のライターで、もう四、五年は手帖の仕事をしているそうです。しっかりした人のようですよ」

「しっかりした人が、こんなデマの記事にするかな。僕はこの保護者と話して、なぜこんな作り話をしたのか、聞いてみたいですね」

「うーん、ネタ元はバラさないでしょう。うちで先生の反論を掲載すればいいじゃないですか。記事の中で、目撃者だという保護者が実在するなら話したいと書きましたよよ」

「それはぜひお願いしたいね。それから、気になることがあって」

私はノートパソコンでブラウザを起ち上げ、先ほど遠田とくだに教えられた捏造ねつぞう記事をいくつか見せた。

「どう思う。これもみんな、僕には身に覚えのないことなんだ。ひどいと思わないか」

「えっ、こんなにあるんですか。この、男子生徒の耳を掴んで持ち

上げてる動画——」

「まったくの嘘っぱちですよ。だいたい、生徒の顔に見覚えすらない」

「それじゃ、この動画は捏造ですか」

「ディープ・フェイクというそうだ」

遠田に聞いた言葉を受け売りで話すと、勇山が大きく頷いた。

「AIですね。湯川先生のように、よくテレビに出ていて、誰でも動画を利用できる方が狙われるんですよ。政治家やタレントは、映像データが豊富にあるでしょう。そういう人のほうが、そっくりに捏造できるんです」

「見て、気分が悪くなりました。誰かが、こんな動画を作って喜んでいるんですよ。僕に対して悪意があるのでしょうか思えない」

「先生は本当に、心当たりないんですか」

勇山が身を乗り出している。その表情から見て、何かひとつくらいは思い当たる節があるんじゃないかと期待しているらしい。

「まったく、ありません」

「この、山ほどある動画とか、記事にもまったく心当たりはないということですか」

「僕だって、問題だと言われている動画などを、すべて見たわけではないですよ。だけど、今の動画なんかは論外です」

「先生は、女生徒と不適切な関係を持ったことはないんですね」

「いっさい、ありません」

ICレコーダーを意識し、はつきりとした口調で言った。

「生徒に体罰を加えたことはありませんか」

勇山が、動画を顎あごでしゃくった。

「——この動画のようなことは、いっさいありません」

「ん？ いや、先生。この動画だけじゃないんです。生徒に体罰を加えたことはありませんか。イエスかノーで答えてください」

私の答えが引っかけたのか、勇山はしつこく重ねて尋ねた。私は眉をひそめた。

「体罰はないです。ノーですよ。そりゃ、生徒もいろんな子がいますから、あんまり馬鹿なことをしていたら強く叱りますけどね」

「湯川先生が子どもを叱る時は、どんなふうに叱るんですか」

「論さとすんですよ。もちろん言葉で」

説明しながら、頭のなかで自分のこれまでの生徒への接し方を振り返っていた。教師になって十五年。体罰などしたことはない。誤解を受けたくないのも、生徒の身体に触れることもなるべく避けている。

だが——。

ふいに、四年前を思い出した。

森田が一年先輩の相手に、ナイフを握って突っかった時のこと

だ。

あの時、私は森田のナイフを左前腕に受け、右手で彼を薙ぎ払った。もちろん、あれは体罰などではなく、正当防衛だ。そのことは警察でも説明済だ。

それから、森田が刺そうとした少年。仲間と一緒にになり、執拗に森田を虐めていた。一度、森田を囲んでひとりが脇を抱え、身動きできなくして頭や身体を小突いていたところに、たまたま私が通りかかった。

私は彼らを注意し、「こんなことをされたら、君らだって嫌だろう」と言いながら、身体を同じように小突いてみせた。

あれは、体罰か？

あんな問題が起きたのは、あの時、一度きりだ。直後に森田の事件が起き、私が「鉄腕先生」ともてはやされることになった。その後、生徒たちも私に一目置くようになり、大きな問題は起きていない。

「———そうですか。湯川先生に心当たりがないとすると、誰が、なぜこんなフェイク動画を流しているのか、調べるのは厄介ですね。先生は有名人だから、嫉妬されることもあるでしょうし。先生自身が気づいてないところで、逆恨みを買っているかもしれない」

勇山の言う通りだ。だがもちろん、このまま泣き寝入りするつも

りはない。事実ではないのだから、反論しなければ。

「弁護士に相談しろと言われたんですが、弁護士の心当たりもなく
てね。どうしたものか」

「ネットで誹謗中傷ひぼうちゆうしょうの被害を受けた人の、相談に乗っている弁
護士なら何人か知っていますよ。こういうことは、慣れた詳しい人
がいいですよね」

「ぜひ紹介してください。ここまで来ると、素人しろうとの手には負えませ
ん」

「わかりました。社に戻って名刺を調べて、明日にでもお知らせし
ます」

「ありがとうございます」

「湯川先生の反論は、すぐ記事にしてデスクに見てもらいます。任
せてください」

勇山は、頼もしく受け合って帰っていった。

四年前、森田の事件を記事にされた時は、あまりにも私自身を英
雄のように持ち上げすぎていて、誇らしく感じたが、正直に言え
ば「やりすぎだ」とも思っていた。だが、こうなると勇山の行動力
が助けになる。

遠田の電話の後、不安にかられていた気分が、少し落ち着いた。

翌朝は再び、体育教師の辻山つじやまが車で迎えに来てくれた。

車の中に散乱していたおもちゃは、きれいに片づいている。

「しばらくホテル住まいですか」

「そうなんです。いや、毎日来てもらうのは、いくら何でも申し訳ないので、僕も交通機関を考えますが」

「僕は別にかまわないですよ」

辻山は、朝から健康的で、澁瀬はつらつとしている。常在じょうざい中学の体育教師のなかで、いちばんの若手だ。容姿も爽やかで、女生徒の人氣が高い。

「来週は中間テストだし、湯川先生も大変でしょう」

的確にハンドルを切りながら、辻山がのんびりと話す。

「まあ、ホテルでも仕事はできますけどね。何というか——自分の身から出た錆さびなら、自業自得じごうじとくと辛抱もできますが、まったく身に覚えがないので。正直、当惑しています」

辻山が聞いてくれるので、学校までの道のりで、つい愚痴ぐちをこぼしてしまう。校門の周辺に、マスコミと思しき大人たちが何人かうろついていたが、テレビカメラはいなかった。昨日、教頭が警察に頼んで追い払ってくれたのが効いたのかもしれない。

辻山と申し合わせて、始業時刻より早めに着くようにしたのだが、職員室に入ると、教頭が学年主任の常見つねみと深刻な顔で話していた。

「ああ、湯川先生。いいところに」

机についた教頭が、手招きしている。昨日の今日だが、教頭はすでに疲れた表情になっていた。

「何でしょう」

「八時ごろに教育委員会の人が来ますから、会ってください。湯川先生から直接、話を聞きたいそうです」

「週刊手帖の件ですか」

「それだけでもないようです。——言いにくいですが、ネットは見えていますか」

——あのフェイク動画の嵐のことか。

唇を噛んで私が答えようとすると、常見がとげとげしい視線をこちらに向けた。

「嬉しそうにテレビなんかに出て、天狗になってるからこんなことになるんだ！ 生徒にも学校にも迷惑をかけて、いったいどうするつもりだ！」

「——私は何も！」

まあまあ、と教頭が割って入る。

「湯川先生には身に覚えがなくとも、これだけ騒ぎになってしまうと教育委員会も放置するわけにはいかないんですよ。直接、説明をされれば、わかってくれるでしょう」

常見は、憎々しげに私を睨み、自分の机に戻っていった。

私も自分の机に向かうと、職員室の向こうから、やりとりを見ていたらしい辻山と目が合った。一瞬、辻山が「大変ですね」と言いたげな苦笑を浮かべ、かすかに頷いたように見えた。

「常見先生、おはようございます」

一年生の国語教師、本村が常見の席に近づいていく。昨日、週刊手帖を嬉しそうに買ってきた男だ。

パウハラぎみの常見は、他の教師たちにもあまり好かれていないのだが、今年、常在中学に着任した本村は、傍から見ても気の毒なくらい、懸命にすり寄っている。常見は不機嫌そうに応じていた。

「——なんだこれ」

机の上に、見覚えのない茶封筒があった。雑誌が入るサイズだ。表、裏を確認したが、封筒には何も書かれていない。振ってみると、ガサゴソと紙の音がする。

ハサミを出して封を切り、中を覗いた。ブラウザの印刷機能を使ったらしい、ブログなどの記事の印刷が、数十枚は入っている。

中をパラパラと見て、血の気が引くのを感じた。

——ネットのフェイク記事だ。

昨夜、遠田に教えられて検索した記事を、わざわざ印刷して私の机に置いた人間がいる。

「——これ、誰がここに置いたかご存じですか」

周囲を見回し、いちばん近い机にいる、理科教師に尋ねた。彼女は赤いフレームの眼鏡越しに封筒を見て、首を横に振った。

「いいえ。湯川先生のじゃないんですか」

「誰かがここに置いたみたいで」

「私は教頭先生の次に職員室に着いて、それからずっとここに座ってますけど、湯川先生の机には誰も近づきませんでしたよ。昨日からあるんじゃないですか」

「——昨日から」

私が帰った後に、校内で印刷して、机に置いたのだろうか。この記事が騒ぎになったのは昨日の夕方以降だ。

親切で置いた——わけではないだろう。

他の誰かに見られたくなく、私は封筒ごと自分のスポーツバッグに落とし込んだ。

——いったい誰がこんな真似を。

気味が悪い。職員室にいる教職員を見回す。よく知っていると考えていた同僚が、みんな赤の他人のように見える。

八時前に教育委員会の委員が到着したと知らされた時も、まだ私の気分は落ち着かなかった。委員の待つ応接室に行き、教頭が立ち会うなか、言ってみれば「事情聴取」を受けることになったわけだ。

「湯川さん」

応接室で待っていたのが信楽裕子しがらきゆうこだったので、少し意表を突かれた。ワールドカップにも出たことのある元女子サッカー選手で、スポーツ医学を学び、体育大学で教鞭きょうべんをとった後、教育委員に任命された。

彼女は私を見ると、朗らかな微笑を浮かべて立ち上がろうとさえた。
した。

「信楽さん、ご無沙汰ぶさたしています」

「お久しぶりですよね。まさか、こんなことでお会いするとは思わなかったですが」

信楽とも、何度かテレビの収録で会ったことがある。好人物で、スタッフにもこまやかに気を遣う人だった。だが、教育委員会は、信楽と私が知り合いだと知っているのだろうか。コンプライアンス上、問題はないのか。

「大丈夫、面識があることは、報告してありますから」

私の不安が表情に出ているのだろう。信楽が安心させるように言葉を継いだ。

「言い換えれば、知人の私を送り込むくらい、教育委員会は今回の件を、何かの間違いだと考えているということですよ。気を楽にして、話を聞かせてください」

こんな状況では、信楽のこちらに寄り添うような言葉が、涙が出るほどありがたい。

昨日から判明したことを説明した。週刊手帖の件や、インターネットに溢れるフェイクニュースの件も、信楽はほぼ正確に把握していた。短い時間しかなかったはずだが、仕事が速い。

「では、すべてデマなんですね」

信楽が、まっすぐに私を見つめる。

「はい。私には身に覚えのないことです」

「それでは、記者会見を開いて正式に否定しましょう。早いほうがいい。記者会見は、常在中学でセッティングをお願いしますか。私も出ますから」

教頭が頷いた。

「わかりました。こちらで準備します」

「週刊手帖に関しては、弁護士と相談したほうがいいですね」

信楽のアドバイスに、私も身を乗り出した。

「いま、知人に頼んで、こういう問題に詳しい弁護士を捜してもらっています」

「決まったら教えてください。それから、警察にも被害を届けたほうがいいですね。ネットの件ですが、かなり悪質です」

信楽が来て、物事が前向きな方向にどんどん進んでいく。心底あ

りがたかった。

「湯川さんが、こんなことをする人ではないことくらい、みんなわかってますよ。誰かがあなたをおとし陥れようとしているんですね。心当たりはないんですか」

「それが——まったくないんです」

「手がかりなしですか」

信楽の表情が曇る。

「教頭先生、失礼します」

応接室のドアを慌ただしくノックする者があり、教頭が立ち上がつて外に出た。

「来てくださったのが信楽さんで、本当に助かりました。私にも正直、いまだに何がなんだかわからず、現実感がなくて」

「とにかく犯人を突き止めましょう。これは、私たち教育者に対する侮辱ぶじやくです。一緒に戦いますよ」

心強い言葉だった。

戻ってきた教頭は、若干じやつかん青ざめた顔色になっていたが、呼ばれた理由については何も言わなかった。

「記者会見は、今日の午後にも開催したほうがいいです。できるだけ早く」

信楽はそう言葉を残し、戻っていった。

「もうすぐ予鈴よれいですね」

教頭が眉根を寄せて、つが呶く。時計を確かめたが、この落ち着かない気分きぶんで、生徒に会うのも気づまりだった。

「湯川先生、シヨートホームルームは、かんざき神崎先生に代わってもらったほうがいいかもしれませんね」

副担任の名前を挙げる。正直、複雑な気分だったが、今はそれも
ありだと思った。

「実は、みずもり水森さん夫妻が来ているんです」

教頭の表情が、先ほどからいつきに暗くなった理由がやっとわかった。

「水森さんですか——」

「困ったものです。会議室に通しましたが、週刊手帖の記事や、テレビの報道をうのみにしているらしい」

水森というのは、三年生の男子生徒の両親だ。子どものほうは、少し「お山の大将」的な尊大さはあるが、よく言えば活発な普通の生徒だ。だが、親が困った人たちだった。いわゆるモンスター・ペアレンツなのだ。

「校長は——」

こんな時こそ、校長が対応すべきだ。

「校長は、のりくら乗鞍先生のところに行っているんですよ。先生に呼ばれ

たらしめて」

区議会議員の名前が出てきた。乗鞍は、常在中学の校区と関係が深いので、何かといえば学校に現れる政治家だ。

水森夫妻が、報道を見て押しつけてきたのだとすると、教頭ひとりに対応を押しつける気にはなれなかった。

「私も行きます」

「——いや、それは」

「私が直接、根も葉もないことだと否定したほうがいいと思います」

「——湯川先生が、そう言われるなら」

教頭の後について、会議室に行った。応接室が使用中だったので、こちらに通すしかなかったのだろう。会議室とは名ばかりで、図書室の隣にある、物置か控室のような空間だ。長テーブルとパイプ椅子がいくつもある。

そこに、四十代の水森夫妻がいた。夫は濃いグレーのスーツを着てネクタイを締めているが、無精ひげぶしゅうが伸びている。妻のほうは、長い茶髪にちりちりのパーマを当て、赤と黒のチェックのワンピースを着ている。

ふたりが、じろりとこちらを睨んだ。夫のほうは、目が赤く充血している。

「お待たせしました」

教頭が、まずは待たせたことを詫びた。水森の夫は、教頭には目もくれず、私の顔を見つけると舌なめずりするようにこちらを眺めまわした。

「これは、これは。湯川先生ですか。あんなハレンチな記事が出たのに、今日も学校に来ているとはね。まさか、教壇に立つつもりではないでしょうな」

そのつもりだった私は、少々ムツとした。

「水森さん、ご無沙汰しています。今日は私の記事をご覧になって、来られたんですか」

「そうですよ。あんなものを見たら、すつ飛んで来るでしょう。他の父兄たちは何をしています？ ぼんやりしすぎだな」

他の父兄も、昨日から何人も電話をかけてきている。だが、それには触れなかった。

「これから記者会見を行う予定ですが、週刊手帖の記事は、まったくのデタラメです。荒唐無稽こうとうむけいもいところす」

「へえ、デタラメ？ あの記事が全部、嘘だというんですか」

「ええ、嘘です」

私はきつぱりと言った。水森夫妻には、これまで何度か痛い目に遭っている。たとえば、息子の水森健人けんとが一年生の時、他の生徒と殴り合いになった。きっかけは健人が、持ち前の尊大さで、他の

生徒のつくった美術作品をけなしたことだったらしい。手を出したのは相手の生徒だったので、夫妻が学校に怒鳴りこんできたのだ。

その件を皮切りに、夫妻は何度も学校に乗り込んできた。子どもの喧嘩に親が出るタイプだった。なぜかいつも、ふたりセットで乗り込んでくる。妻のほうは、今はふてくされたようにこちらを睨むばかりだ。

「あれが嘘なら、どうしてそんなデタラメな記事が雑誌に載ったりするんですか。湯川先生が、学校の仕事をおろそかにして、テレビに出たりしているからじゃないんですか」

「おろそかにしたりしていません。ちゃんと、学校の休みを利用してのことですから」

「休み？ 学校の教師に休みなんてあるんですか？ 二十四時間三百六十五日、生徒のことを考えているのが教師でしょうが」

水森が目吊り上げる。無茶苦茶な理屈だが、本人はそう信じているらしい。

「とにかく、学校の仕事はきちんとしていますから」

「きちんとしていたらね、先生。こんな馬鹿な記事が週刊誌に載ったりしないですよ」

机の上の週刊手帖を、手の甲で勢いよくパンと叩く。このために持参したのだ。

「こんな記事が出ただけで、生徒にどれだけ迷惑をかけているか、わかってるんですかね？ おまけに、昨日からマスコミが校門のあたりに張り付いているせいで、子どもが怖がっているそうじゃないですか」

私は初めてたじろいだ。私のせいではないが、子どもの恐怖は感じるからだ。

水森の目が勝ち誇ったように輝いた。いつも不思議に感じるのだが、クレーマーやモンスター・ペアレンツと呼ばれる人々は、なぜか相手の弱点を見抜くのに長^たけている。弱みを見せると、嵩^{かさ}にかかって責め立ててくる。

「ちゃんと責任を取る気はあるんでしょうな。だいたい、なぜ今日も湯川先生が学校に来ているんですか。騒動に責任を感じたら、当然、謹慎しているべきでしょうが」

「いや、水森さん。湯川先生には、これから記者会見で記事の内容が嘘だと証言していただきますから」

教頭が無理やり割って入る。教頭も、水森には手を焼いている。水森健人も今年で三年生、あと一年で卒業だ。子どもに罪はないが、この親と手が切れると思うとホッとする。

「教頭先生、この件は学校側の監督責任を問いたいですよ。教頭たちが、湯川先生を野放しにしているから、こんな事件が起きるんで

しようが」

水森がねちねちとしつこく教頭に苦情を言い始めた。教頭の眉間に深い皺しわが刻まれる。

「いえ、湯川先生は教師として、必要なことをされているだけです。それより、健人君はこの件について何か言っていますか」

「落ち着かなくて、学校に行っても勉強が手につかないと言っていますよ。どうしてくれるんですか、こんなことになって」

「健人は学校に行きたくないと言ってるんですよ！ 学校の責任ですよ！」

水森の妻が、甲高い声かんだかで叫んだ。彼女はめったに口を開かないが、話し始めると耳に刺さるような尖った声を出す。

教頭が顔をしかめた。

「記事そのものが間違いなんですから、じき沈静化するでしょう。健人君には、落ち着いて学校に出てくるよう話してあげてください。

何でしたら、私が直接話しますから」

「楽観的すぎませんかね。それより、担任の先生を変えていただけませんか」

水森が身を乗り出した。

「湯川先生が担任でいる限り、こんな騒ぎは何度でも起きますよ。なにしろ、有名人、、なんだから」

今度は私が顔をしかめた。心地よさそうにこちらを睨む水森の目を見て、彼の心底が透けて見えたのだ。

——こいつ、私に嫉妬していたのか。

道理で、執拗に絡んでくると思った。水森健人は、一年生のとき私のクラスになり、二年生のクラス替えで、いったん私のもとを離れた。二年生の時の担任はベテランの社会科教師で、年齢が上だから、水森もあまりクレームをつけてはこなかったのだ。三年生になって、また私が担任になったとたん、ねちこく絡んでくるようになった。

つまり、単純に私が気に入らなかったのだ。

水森夫妻はいま、繁華街でスナックを経営している。主に妻のほうが店に出ている、夫のほうは経営担当のようだ。

夫は若い頃、俳優を目指していたらしい。健人が一年生の時、友達に自慢していたのを私も聞いてしまった。芸能事務所に籍を置き、コンビニやパチンコ店でアルバイトをして食いつなぎながら、オーディションを受けまくっていたようだ。

だが、うまくいかなかったのか。

テレビに対する未練があつて、たまにとはいえ、テレビのバラエティ番組に登場する私を見ると、腹立たしいのかもしれない。

「水森さん。湯川先生に落ち度があればともかく、今回の件は、事

実無根と私どもは考えています。ともかく、もし必要があるなら、担任の件は教育委員会や私どもが考えることですから」

教頭が毅然と胸を張る。水森はあからさまにムツとした表情を浮かべた。

「よつぽど自信がありそうですね。——それなら、しばらく様子を見ましょう。治まらなければ私にも考えがある」

夫妻は立ち上がった。

「そいつの化けの皮が、剥がれなきやいいですがね」
捨て台詞を吐いて、彼らは帰っていった。

4

記者会見は、常在中学の体育館で行った。

体育館を使う授業は、運動場など別の場所に変更し、パイプ椅子を並べ、午後一時からとマスコミ各社にアナウンスした。

前の長机に並んだのは、校長、教育委員会の信楽と、私の三名だ。こういう時だけ、校長は張り切って表舞台に立とうとする。

「まず皆さんにお願いしたいのですが、この件で私たちがもつとも留意しなければならぬのは、写真の出た女生徒のプライバシーです。生徒になんらかの被害が及ぶようなことは、ぜったいに避けね

ばなりません」

進行役の信楽が口火を切ると、記者たちは一瞬しんとして、何人ががしつかりと頷いた。特に、女性が真剣な表情で聞いている。

その様子を見て、私も胸を撫でおろした。目隠しが入っているとはいえ、あんな形で中学三年生の少女の写真が使われたことがすでに、犯罪にも等しい。ここに居る記者たちは、それを理解してくれている。

週刊沖楽の勇山記者もいるし、他の顔見知りも何人か交じっていた。

「これから湯川先生が説明しますが、女生徒の特定につながるような情報は、いっさいお話しできません。ご理解をお願いします」

信楽の、元サッカー選手としての知名度と、凛々リッリしく爽やかな風貌とが、この記者会見にもプラスに働いていた。しかも彼女は、現役時代からマスコミ慣れしている。

「常在中学の校長、末光すえみつでございます。このたびは、皆さまご多用ななかお集りいただき、まことに恐縮です」

緊張のせいなのか、赤い顔をして校長がマイクを握った時、嫌な予感がした。

「まずは、当校に関わる問題で、このように世間を騒がせ、大変申し訳ございません」

何を謝るんだと驚き、私は左隣に座る校長を振り向いて凝視ぎようしした。彼は百人近い報道陣を前に、いつもと違う高揚こうようを感じているのか、頬を赤くし、額ひたいに汗を浮かべている。先ほど、教頭を含めた四人で、記者会見の段取りを考えた時とは話が違う。

ひよつとすると、こういう場に出ると、なんとなく謝らなければいけない気分になってしまうタイプなのかもしれない。

「これから少しお時間をいただいて、一昨日発売された週刊手帖の記事につき、説明させていただきます」

「校長、それについては私から」

早いうちに、私がマイクを取ったほうが良さそうだった。私は強引に話に割り込んだ。校長がちらりと不満そうな色を目に浮かべた。

「湯川です。お忙しいなか集まってくくださった皆さまに、御礼申し上げます。また、報道を見て驚いておられる常在中学の生徒とその保護者の皆さま、地域の皆さまには、どうぞ安心してくださるようにと申し上げたいです」

パイプ椅子に腰かけ、私を見つめ返す百対つひの目を、素早く見渡す。

「週刊手帖の記事に書かれていたことは、事実ではありません」

力強く否定すると、記者たちからため息のような声が漏れた。私の態度に、ためらいがないからだろう。私は言葉を飾らず、率直に

話すと決めていた。

「私と生徒が、まるでビジネスホテルの一室で会っていたかのような写真を使われておりましたが、あれは合成写真です。写真のキャプションにもその旨むねが書かれておりましたが、読者の誤解を招く表現で、断固抗議します」

何度もフラッシュが焚たかれ、シャッターを切る音がする。テレビカメラも回っている。

「記事の内容について、本来なら事実とファンタジーの切り分けをするところなのでしょうが、今回は『すべてデマ』としか言いようがありません。記事の中で、今年の三月に新宿のビジネスホテルで私が生徒と会ったことになっていますが、三月に仕事の都合で新宿のビジネスホテルに宿泊したことは事実です。三月十二日、シングルシングルの部屋に一泊しました。もちろん、私ひとりです」

会場の椅子に腰を下ろした勇山記者が、ちらちらと前方の女性記者に視線をやるのが目に留まった。紺色のパンツスーツに身を包み、ほっそりした三十前後の女性だ。髪はシニヨンというのだろうか、小さいお団子状にまとめ、すらりとした首の長さが際立きわだっている。

信楽が「質問はありますか」と言ったとたん、その女性が手を挙げた。

「週刊手帖の安藤と申します。先生が『すべてデマ』とおっしゃる、

その記事を書いたものです」

——この人が安藤珠樹か。

私は驚いて彼女に見入った。安藤は、怒ったような目をしていて。記者たちが、彼女の声にもる怒りに興味を覚えた様子で、わざわざ身体の向きを変えて、見ている。

「三月のビジネスホテル宿泊は、私も裏を取ってあります。正直に答えてくださってありがとうございます。その三月十二日、先生が女生徒をともなってホテルに入るところを、目撃した人がいるのです。先生のことをよく知っている人物です。それについては、どう説明されますか」

マイクを回された私は当惑した。

「説明と言われてもですね。その、目撃した人が誰なのか聞いても、答えてくれないでしょう？ 私は正直に話しているんですよ。その人が勘違いしたのか、嘘をついているのか、それはわかりません。しかし、私はその日、相手の年齢にかかわらず、女性と泊まったりしていません」

そもそも、私が「そんな事実はなかった」ことを証明するのは難しいし、そんな義務もないはずだ。私が誰かと泊まったと言うのなら、そんな言いがかりをつけるほうが証明すべきことだ。

証拠もなくこんな記事を書くなんて、名誉棄損きそんもいいところだ。

その言葉が喉元までせり上がってきたが、我慢した。

「その目撃者は、こうも言っています」

安藤は、手帳に目を落として読み上げた。

『子どもたちから聞いたのだが、湯川先生は生徒の「えこひいき」が激しい。気に入った生徒には、先生がまるで保護者のように、温かく手を差し伸べる。湯川先生が、去年の担任だったクラスでいちばん可愛がっていたのが、問題の女生徒Aだ。子どもが言うことだからと私も話半分に聞いていたが、去年の文化祭で、Aの身体にべたべたタッチしている湯川先生を見て、あの話は本当だったのかと私もようやく理解した』

私は啞然とし、言葉を失って安藤を見つめていた。今までこの件に興味を失いつつあった他の記者たちが、今の証言内容を聞いて、再び関心を取り戻すのを感じた。

——私が、守谷穂乃果をえこひいきしていただって。

とんでもないでまかせだった。どんな生徒に対しても公平に接している。中学生にもなると、子どもも色々だ。真面目なの、おとなしいの、活発なの、やんちゃ坊主、大人顔負けに狡猾な子だっている。だが、そこは十代前半の子どもで、どれだけワルっぽくふるまっても、大人の目から見れば可愛いものだ。

守谷穂乃果は、勉強もできるし性格も真面目だ。一時期、親友を

失って荒れていたが、すぐ立ち直った。いい子だと思うが、だからと言ってえこひいきなどしない。

ましてや、身体を触るなど論外だ。

だが、去年の文化祭と妙にこまかい指定を聞いて、記憶を探った。

去年、私の受け持ちクラスの出し物は演劇だった。クラスにライトノベル作家志望の少年がいて、彼が台本を書いた勇者の転生物語だった。何にもできない中学生が異世界で目覚めると、他人に成りすましたうえに、その能力をコピーすることができる特殊能力を持っていたという話だ。その能力を利用して、どんどん異世界でのし上がっていく。

守谷は、異世界の魔女役だった。真っ黒なフードつきのマントと、ねじれた杖は、小道具係のお手製で、フードが首のあたりでもたついていたので、直してやった記憶はある。まさか、そのことを言っているのだろうか。

「正直、何の話をされているのか——と、困惑しているのですが」

私はマイクを握り、安藤に向かった。

「誤解を受けないように、性別にかかわらず、生徒の身体にみだりに触れたりしないよう、ふだんから気をつけています。特定の生徒をえこひいきしたりもしていません」

安藤の目に、炎が燃え上がるのが見えた。なぜか彼女は怒ってい

る。目撃者に、何か吹き込まれたのだろうか。

「いや、待ってください。今日のこの場合は、週刊手帖の記事内容について、湯川先生から話を聞くために開催しています。先生がえこひいきしていたかどうかは、また別の話ですから。道義的な問題はあっても、生徒をえこひいきすることと、女生徒に性的な接触をすることとは重みが違います」

校長が割り込んできた。私は思わず顔をしかめそうになった。校長の言い方だと、まるで私が一部の生徒を特別扱いしていたことを認めているようにも取れる。

他の記者が勢いよく手を挙げたので、信楽がそちらを当てた。『『東京じゃーなる』の吉川です。ネットにいま、湯川先生が男子生徒に体罰を加えている動画などがたくさん出てきているのですが、ご存じでしょうか』

私はなるべく冷静で、余裕のある態度を心掛けた。

「人に教えられて、検索しました。たしかに、私もびっくりするほどありましたね」

会場からクスクスと笑い声が漏れ聞こえる。私は気を良くした。

「あの動画についてはいかがですか。男子生徒の耳を掴んで、身体が浮くほど持ち上げて揺さぶっていますか」

「フェイク動画でしょう。なぜなら、あの男子生徒を見たこともな

いからです。どこかの動画を持ってきて、僕の顔だけ入れ替えたんじゃないでしょうか」

「捏造だとおっしゃるんですか。それにしても、ずいぶん精巧でしたけど」

「はい。間違いなく捏造です」

記者たちがざわめく。もちろん彼らもあの動画を見たのだ。

「詳しい人に聞いたところ、今はああいう動画を簡単に作れるそうですね」

私は遠田の受け売りを口にした。

「では、あくまで湯川先生は、生徒に対する体罰や、性的な接触はしていないと主張されるんですね」

「はい、しておりません」

「誰かがああいう動画などを捏造したということですか。心当たりはありますか」

「いいえ。もし心当たりがあれば、とつくに警察に行ってるんですけどね。むしろ皆さんに教えていただきたいくらいです。あんな動画を作って僕を陥れるくらい、恨んだり、嫌ったりしている人をご存じですか？」

私かとぼけた表情で尋ねると、また会場から笑い声が漏れた。和なごやかで、友好的な空気が流れた。

「重ねてのお願いになります、生徒のプライバシーにご留意ください。将来のある子どもたちです。よろしく願います」

教育委員の信楽がそう締めくくり、記者会見はお開きになった。

勇山とは一瞬視線が合ったが、こんな場で親しげにふるまうことはできない。互いに目で挨拶して、私は信楽や校長と一緒に席を離れた。週刊手帖の安藤珠樹は、最後まで私を睨むように見ていた。

「まずまず、問題なく終わりましたね」

信楽がホツとしたように言った。いちばん胸を撫でおろしたのは私だ。昨日、週刊手帖の記事を見せられた時には、不意打ちで横面よこつらを殴られたような気分がしたが、今日の様子を見るかぎり、安藤と
いう記者の独断専行だったようだ。

バラエティ番組や報道番組で、今日の会見の様子が正しく報じられれば、この騒ぎもおさまるに違いない。

信楽も同意見だった。

「弁護士と警察には、すぐ相談したほうがいいです。会見のニュースが流れても、悪いことは嘘でもすぐ拡散しますが、良いことは真実でもなかなか拡散しないものです」

彼女の言葉には含蓄がんちくがある。冤罪えんざいで容疑者扱われた人が、後で無実の罪だとはつきりしても、報道されないケースが多いのだ。

マスコミが求めているのは真実ではなく、価値のあるニュースだ。

つまり、一般大衆が飛びつく目新しい情報だ。

たとえ真実であつても、読者に飽きられたネタなど報道する値打ちがない。

一般大衆が注目しているうちに、間違いを訂正させねばならない。

「もし必要なら、名誉棄損で裁判に訴えることも考えたほうがいいかもしれませんね」

信楽はそう助言し、帰って行った。

「やっぱり、すぐに記者会見を開いて、良かったですね」

教頭が、会見の様子を観察して、笑顔になっていた。

「まだわかりませんよ。これで、報道の雰囲気が変わればいいけど」

校長は依然として渋面じゆうめんをしている。

「乗鞍先生が、とても心配していてね」

校長が今朝、区議会議員の乗鞍陽子ようこと会っていたことを思い出す。元は高校教師だった議員で、五十代後半になる今も、教育に関する情熱を持ち続けている。

「何かおっしゃったんですか」

「もし、子どものメンタルに影響を与えることが起きた可能性があるなら、生徒からのヒヤリングや、カウンセラーを呼ぶなどの対応を考えたほうがいいというんだが」

「ヒヤリング——」

教頭が、かすかに苦い表情を浮かべている。

「いったい、生徒から何をヒヤリングするんでしょう」

校長が一瞬、言い淀よどんだ。

「うーん、これは乗鞍先生が『もし本当に何かあったのなら』と前置きされたことだよ。生徒から、湯川先生について、見たことや聞いたこと、どう思っているかなど、聞いてみてはどうかということだ」

「そんな馬鹿な」

教頭の語気が荒くなる。

「あの先生は、現場によけいなくちばしを突っ込みすぎます。そんなヒヤリングは、湯川先生の人気投票にしかないでしょう。だいいち、ヒヤリングを実施すれば、かえって湯川先生に疑いを持つ生徒が現れるかもしれません。まだ中学生の子どもなんですよ、相手は。なりは大人びてますが、判断力は年相応なんですから」

私が言いたかったことを、教頭が代わりに言ってくれた。乗鞍議員は、区議会に教育のプロとしての立場で参加していると自認しているらしいが、時おり、突拍とつぱようし子もないことをしたり、言ったりするのだ。

「いや、私ももちろんそう思う」

校長が慌てて弁解した。

「だが、乗鞍先生は区議会だけじゃなく、与党の本部にも影響力があるからな。早く騒ぎがおさまればいいが、また何を言ってくるか」

そんなことは、相手が何か言ってきたから考えればいいことだ。

校長は言い訳しているが、ひよつとすると校長も水森と同じで、私の「芸能活動」が気に食わなかったのだろうか。校長だけではない。

学年主任の常見も、その腰巾着こしぎんちやくで国語教師の本村もだ。他の教師たちだって、何を考えているかわかったものではない。

私に協力してくれているのは、今のところ教頭と、体育教師の辻山だけだった。

「なるべく早く、弁護士に相談します。これ以上、騒ぎが大きくならないように。そしてもちろん、早めに終息するように」

「そうですね。そうしてください」

校長と教頭が、そろって頷いた。

今日一日は、授業を休んで自習にするよう指示され、私は職員室で中間テストと自宅学習用のプリントを作っていた。

午後三時すぎ、固定電話が鳴った。

とっさに私が受話器を上げた。他の教師たちは、ほとんどがまだ授業に出ているし、教頭はスマートフォンで誰かと喋っている。

「はい、常在中学です」

『そちらから転校しました、守谷穂乃果の母ですが、教頭先生はいらっしゃいますか』

——守谷さんか。

ハッとして、私は教頭の姿をもう一度見た。やはり、まだ電話に出ている。しかたがない。しばらく、私が話すしかない。

「守谷さん、湯川です。このたびは、お騒がせして——」

守谷も息を呑んだようだった。

『湯川先生——』

「穂乃果さんは、変わりありませんか。新しい学校に馴染めそうですか」

『それが——』

守谷の母親は、話しくそうに口ごもった。

『穂乃果は、前の学校で「鉄腕先生」のクラスにいたと話していたらしいんです』

話の成り行きが見え、私は息を殺して続きを待った。

『男の子が、学校にこっそり週刊手帖を持ってきたらしくて。写真を見て、穂乃果じゃないかと言いだしたようで』

「そんな——」

『先ほど、真っ青な顔をして家に帰ってきました。自分の部屋にこもってしまって、出てこないんです。学校に電話して、先生に尋ね

てやつと様子がわかったんですよ』

中学生くらいの子どもの、つまらないことでも執拗に迫及する残酷さや、潔癖さや、他人の尻馬に乗りやすい幼さや、精神的に追いつめられやすい弱さを、私は日々、目の当たりまにしている。

たとえ週刊手帖の写真が自分だと気づいたとしても、目隠しが入っていて顔は見えないのだから、自分ではないと突っぱねればいいのだが、守谷穂乃果は生真面目だから、嘘をつけなかったのだろう。言葉もなかった。

もつとも私が恐れていたことが、起きてしまった。

事実ではないのだから、私自身は当然、はっきりと否定する。場合によっては、雑誌を訴える。私にはその強さがある。

だが、私と「ホテルに行った」と書かれた、中学生の少女はどうなる。

おかしいことだが、こうした話題になると、世間は突然、女性の側に厳しい態度を取る。痴漢の被害に遭えば、肌を露出する衣服を着たり、派手な化粧をしたりする女性の側に落ち度があると言われる。薬物を飲まされてレイプされれば、男とふたりきりで食事をすれば当たり前だと非難される。場合によっては、女性の側が何か期待していたのだろうと言われかねない。

教師と同じホテルに泊まったと言われた中学生が、周囲からどん

な目で見られるか、考えただけで寒気がする。

守谷穂乃果がどんな顔をして自宅に戻ったか、想像がついた。

『どうしたらいいのか——』

守谷の声が震えている。

「和香^{わか}さん、落ち着いて」

私が宥^{なだ}めようとした時、教頭がスマホを置いてこちらを見た。

「どなたですか？」

「守谷さんのお母さんです」

受話器を押さえて答えると、教頭が飛んできた。私と守谷の家族を接触させたくないのだ。万が一、後で何か起きて、「口裏を合わせた」ように見られてはいけないと説明していた。一理ある。

守谷の母親は私の高校の同級生で、昔はつきあっていたこともあるのだから、よけいにまずい。もちろんそんなことは、学校の同僚にも、妻の茜^{あかね}にも話したことはない。

「向この学校で、生徒に知られていじめられたらしいです」

さっと教頭の顔色が曇る。

「もしもし、お電話変わりました、教頭の土師^{はじ}です」

教頭が守谷和香と話している間、ぼんやり聞いていた。

守谷のために、私にできることはあるだろうか。もしも、私が向この学校に乗り込んでいたりすれば、よけいに奇妙に見えるだ

ろう。守谷にかけられた疑いを晴らすには、まず私にかけられた疑惑を晴らすことだ。

私の身の潔白を証明すれば、誰も彼女を後ろ指で差したりはしなくなる。

「すぐに、そちらの先生と相談します。ええ、湯川先生は潔白ですよ。もちろんです。誰かがとんでもない嘘をついて、先生を陥れようとしているんです。事情を話して、学校側が穂乃果さんを見守ってくれるように頼みますから。——そうですね、明日は休ませてあげたほうがいいかもしれません。それも私から話しておきます」

受話器を置いた時、教頭の眉間には深い皺が刻まれていた。

「あの記事は罪深いですよ。たとえ目隠しを入れていたとしても、未成年の写真をあんな形で掲載するなんて——」

「キャプションに、イメージ写真だと書いてありましたよね。いざとなれば、あれを免罪符にするつもりじゃないでしょうか」

それにしても肖像権の侵害ではある。たとえ犯罪者でも、未成年なら個人情報徹底的に隠そうという世の中だ。罪もない少女の写真ごんごどうだんを悪用するなど、言語道断だった。

——記者会見で、少しは良い方向に事態が進展し始めたと感じていたのに。

教頭が、守谷の転校先と話すと言って、席に戻っていった。

ふと気づくと、スマホに勇山記者からメールが届いていた。弁護士の名前と連絡先を教える内容だった。

私は迷わず、弁護士に電話をかけた。

〈つづく〉